柔術活法の研究ノート１.２.３.４.

― 武術に起原を持つ活法技術研究から ―

Study of the *jujutsu-kappo* 1.2.3.4.

― Clarifying the *katsu*-techniques by researching the *bujutsu* techniques. ―

体育学部健康科学科
久保山和彦
KUBOYAMA, Kazuhiko
Department of Health Science
Faculty of Physical Education

体育学部健康科学科
猪越　孝治
INOKOSHI, Takaharu
Department of Health Science
Faculty of Physical Education

キーワード：武術，柔術，殺法，活法，心法

はじめに

武術の技法を大別すると，殺法と活法に分ける事が出来る。殺法は文字通り戦場の戦いにおいて，対峙した相手を殺傷する技法をさす。活法は，人を活かす為の医療技法や，その時代の死生観に反映した哲学，宗教や心の操作法により，自分や相手だけでなく，広く社会の人，人と人との関係，物，出来事等，人を取り巻く森羅万象を順調に機能させる為の理をさし，極めて武術的な世界観を持ち，武術兵法をもさしている。これら殺・活法は，いずれも戦闘由来の技法であり，常に表裏一体の関係にあり，現代に継承されている。

筆者らは，柔術活法を軸に教育，体育，柔道，空手，柔道整復，医療文化等の研究を行い，身体技術論を社会文化史的観点，医科学的観点等を応用的に用い，文献調査，実験研究を行うことで，柔術活法の全容を明らかにしている。その過程で現代武道に伝承されている「活法性」を見出し，「武道する事」が，その目的さえ誤らなければ，いかに教育的，福祉的，医療的分野において有効であるかを解明したいと考えている。

そこで本稿において，平成25年度の１年間に活法研究として行い，日本武道学会，国際武道シンポジウム，International Association of Judo Researchers (IAJR), Ido Movement for Culture, Journal of Martial Arts Anthropology等の国内外で発表した拙稿を振り返り，整理，検討する事で「柔術研究」の学説に，新たな知見を提供する端緒としたい。また，未だ成熟途中にある柔道整復学研究分野に対し，新たな研究スタイルを提案する。

研究ノート１.

第46回日本武道学会（抄録）
武術由来の身体技法にみる医療文化 －柔術活法研究から－を題材として，殺活に検討を加える。

［目的］ 楊心流柔術と天神真楊流柔術にある武術伝書，文献等を資料とし，「敵を倒す為の戦闘装置（殺法）」として語られる武術の側面に，「人を癒し，救う為の医療装置（活法）」の側面を有している事を明らかにした。これは「戦闘の結果として，受傷した怪我などを治す為に，武術的医療の技法が発祥し，発展した。」とする，［殺法→活法］の殺法先行の一般図式となるのだが。管見の調査により，この図式に検討を加え，逆説的な仮説「先人は，活法の探求の為に武術修行した。」［活法→殺法］の図式に再構築したものである。
［研究方法］ これまで我々は，柔術活法の技法分析誌や施術効果実験等の「活研究」，また「接骨医学史」等の研究知見を包括的分析する事で，「活法は，柔術である。（2012. 9.日本武道学会45th. 久保山）」の結論を得た。しかし，その中では，絞め技で発生した気絶者の症候や，その落ちにする「活（かつ）」の入れ方の分類，当て身の急所と，「当て」による症候記述やその対処法等，［流派の特徴的な殺法→

活法の分類］（2013. 8. The 8th International Judo Research Symposium. By KAZU）である事が解った。本論では，「活法探求に柔術が活用されてきた。」とする逆の文脈で論じた。また，ここでは活法技法を中心に，楊心流の発祥の事情を調査したところ，この流儀は江戸時代の医家であり，始祖の秋山，三浦，大江（文献により諸説ある）は，「医療の技法探求目的で，柔術の技法を国内外に求めた。」可能性が高い。また，幕末，明治期の様々な変革の時期（明治維新）に隆盛，生き残り，嘉納の講道館柔道に繋がる，磯の天神真楊流を対象に，それぞれ，活法に関連する流儀の様相を調査したところ，［楊心流→天神真楊流→柔道］の活法系譜を発見した。

［結論］ 陳元贇以前の柔術流儀である楊心流は，嘉納の柔道から，武技の系譜として遡れば，明治時代の天神真楊流，江戸時代の楊心流に至る。また，この時期の流儀は，戦場の組み打ちを主とした，実践的戦闘技術が多く存在したが，その中にあり，楊心流は医家に興り，「当て身の活法」を探求した。（「三浦楊心は医を以て業としていた。」）つまり，この流儀は，医法，健康法として発生し，武技の要素を取入れて，武術として発展させたのだ。一方，明治時代の天神真楊流では，楊心流の活法（生かし）を，患者に施す医療として発展させ，明治維新後の武道，医療改革の中，［骨接ぎ，接骨（医療活法）と柔術道場（武技伝達）］を併設，運営していた事が知られており，「柔術生理書（明治29年）」記述当時，道場で接骨を営んでいた者に，磯（５代目），吉田，田子，八谷，今泉，井上らがある。これらは皆，天神真楊流家であり「警視庁武術世話掛」，「剣術柔術調査（1883.）のベルツ（医師）に柔術指南」と，武術，医療文化に影響をおおいに与えた。（久保山和彦[1]，佐々木武人[2]　[1]環太平洋大学，[2]国士舘大学武道徳育研究所）

研究ノート１．の検討

日本最古の柔術系譜を持つとされている竹ノ内流柔術（岡山県1532.）の伝書には活法の記述がある。通説的医学史に語られる，中国（陳元贇）がもたらした，武術由来の医療技法である整骨，接骨術の伝来より100年近く前の事である。この活法関連の文献以来，現代に至るこれまでの活法学説では，「殺活の表裏は，表が殺法であり，裏が活法」であった。しかし，我々の調査で，明治期までに200を超える柔術流派のいくつかが，秘伝の活法を示唆する言説や記述を残しており，その技術や系譜を分類してみると，殺法と活法の通説的論述に新たな知見を付け加える必要性を感じている。それは，まず活法発祥の理由にある「殺法の結果発生した病理現象を治す為に活法が発生した。」とする論述に対して，「活法の探求から殺法の技術を発展させた。」と，主題を逆説的に捉える要性がある事，その時の社会事情が，同軸で武術の行使目的のベクトルに強く影響した事を提言したい。

例えば，秋山の楊心流柔術（江戸期）は医者の家系に興り，活法の伝書を持ち，また磯の天神真楊流柔術（明治期）にその技術的影響を与えているが，楊心流柔術（秋山）は中国医学の経絡・経穴の探究目的に柔術修行を行い，その成果は経穴への「当て身技」を駆使した天神真楊流の初代磯の武勇伝に繋がる。つまり，「柔術する事」の目的にある「殺の鍛錬から活が生まれた。」と「活の探求が殺を育てた。」の表裏転換の実例がある。この例からも殺活対等の価値関係を見直す必要がありそうである。また，絞め技で「落ち」に至った者に対する活論が中心の，「殺は絞め技，落ちは症状，活は蘇生」という文脈に対して，疑問を持っている。なぜなら，「当て身で落とす技もあるのだ。」

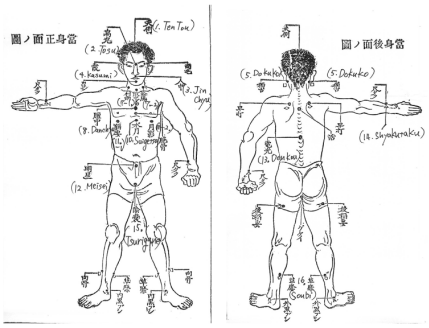
研究ノート２．

以下はブラジル（リオ）で行われた柔道研究者シンポジウムにおいて行ったポスター発表の一部である。

The study of *Judo-kappo*：Correlative study of *Sappo* and *Kappo*. -From *Waza* (technique) of *TenjinShinyo-Ryu*.- The 8th International Judo Research Symposium

Object: The purpose of this study was to clarify the *jujutsu* technique. These weren't only the *atemi, shime* and joint lock but also the healing, *Seikotsu* and the cardiopulmonary resuscitation (*Katsu*) includeing "CPR". The healing and seikotsu are parts of judo therapy and another is CPR now a day. We think all these are judo-kappo. We considered correlation of Sappo and Kappo in this paper.

Figure.1 *Atemi* points of *TenjinShinyo-Ryu*.



Modified from *Inoguchi*.
(*JuseiSeirisho*, pp80–90, Meiji-era.)

Results: We found that the *Atemi*-points were the same as the *Waza*-points. For example, the *Atemi*-points to be called *Suigetsu* [Figure.1-No.10] to be called *Suigetsu*. And it's skill to be named *Suigetsu*. [Figuer.1]

Moreover *kappo* is the art of survival. Both martial arts were correspondingly used by great warriors during the Warring States period. Today, *kappo* is a part of the medical system. However, in those times *kappo* was used by warriors, and therefore considered a martial art. In other words kappo was one of the alternative techniques of "Sappo" martial arts.

Poster Presentation 8.25. 2013, KAZUHIKO KUBOYAMA

研究ノート２．の検討

活法に関する研究は，管見の調査では「嘉納の柔道絞め技の結果発生した気絶，落ちに対する医療技法である。」という講道館医事研究会（1932.）以来の医科学的研究以外に存在しない。これは，柔術研究ではなく，嘉納の柔道研究の範疇にある。

研究ノート２．の拙稿において，調査を行った天神真楊流柔術の当て身技は，一般論で取り上げられる「打撲傷を負わせる。」「骨を砕く。」等の目的を持たない殺法で，人体の弱点ポイント（急所）を経絡（Figu.1）に求め，現代柔道の乱取りや試合には禁止されている当て身技の結果，絞め技に類似の症状である「落ち」に向かわせ，その蘇生の技法を「活法」として，当て身技の有効性が示唆されている。

この文献を整理して［急所への当て身→落ち→活法］という新たな文脈の発見を行った。また，この武術の指南書（柔術生理書1896.）では，明らかに活法は，武術として取り扱われ，殺の当て身と活の呼吸活の他に，現代の柔道整復にあたる接骨療法が記載されている。

明治期隆盛を極めた天神真楊流柔術の五代目磯を含め，多くの天神真楊流柔術家の道場では，「ほねつぎ」「接骨」の業を行っていた事からも，「ほねつぎ（柔道整復）を柔術の一部」と捉えて民間に普及していた。

こうした記述の分析から，我々は，天神真楊流の活法は柔術であり，ほねつぎ，接骨もまた柔術であったと結論している。

現代の柔道は起倒流，天神真楊流を学び，柔術流派を統合した嘉納治五郎が，柔術を近代スポーツに加工して創設したものであるが，その後の柔術は，明治期イデオロギーの影響により，柔道とはっきりとした区別がなされた。柔道は武術性（殺法）が持ちうる「棘のトリミング」が丹念になされ，体育となり，近代スポーツとなっているが，柔術技法の使用目的は，架空の実践の場（競技スポーツ）でなく，庶民の日常の場に開かれている。そして戦士の身体技法から，庶民の身体技法となった。嘉納もまた，ほねつぎと，柔術道場経営をしていた天神真楊柔術家の福田に師事した。（2013. 2.に99歳で亡くなった講道館女子柔道家の福田敬子女史は，前述した福田の孫）

現代の競技柔道は「殺法」から派生したとする通説があるが，我々は，「柔道が競技化した時点で」，さらに「柔術が民衆に開かれた時点で」，その武術殺法性は失われている。という命題を未だ議論中である。

研究ノート３．

ポーランドにおける日本武道に関する研究は盛んであり，スポーツ研究関連ジャーナル紙には，「武道，武術，マーシャルアーツ」分野で活動している団体が散見できる。それは，アーカイブス・オブ・ブドー社と，イドー・ムーブメントスポーツ・フォー・カルチャー社を挙げる事が出来る。

研究ノート３．において，久保山がポーランド・ジャーナル紙に，投稿し掲載された活法研究である「柔道家の心の操作法（心法）」を問題としてみたい。

この拙稿は，現代中高年の登山ブームには，登山のスポーツ健康法に関わるフィジカルな面と信仰心や哲学，生き方に関するメンタルな面のニーズが，このブームを支えている。つまり，「登山は心身に効くの

である。」という考えが，かつて青春時代にアルピニズム・レジャースポーツに向けられた志向とは別の働きとして作用していると考えている。

前述ヨーロッパを中心とする武道人気も，「心と体に武道は効くのである。」とした，体験的一般言説が，フィジカルフィットネスや，アジアに対するオリエンタリズムとは別の作用軸を持った「達成目標」が存在すると考える。

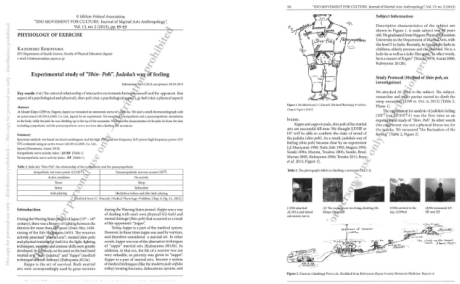
この研究では，小型心電計を柔道家に装着して登山を行わせ，フィジカル面データである心拍数の増減を記録しながら，メンタル面（武術的心の操作法）の指標として交感神経刺激と副交感神経刺激の様子を同時に記録した。ここでは，柔道家の体力を測定したのではなく，「心法」の記録を目的としており，極めてまれな実験研究である。

Experimental study of "*Shin-Poh*". *Judo-ka*'s way of feeling

Introduction: In Mount *Kinpo* (2599m, Nagano, Japan) We measured an autonomic nerve of *Judo-ka*. We used small electrocardiograph using an active tracer (AC301A, GMS. Co. Ltd., Japan) for an experiment. Subject Information: Descriptive characteristics of the subject are show in Figure1. Male subjecter was 48 years old. He graduated from Nippon Physical Education University in the Department of Martial arts, with the level 5 Judo. Recently, he has thought children to elderly persons and "disabled people" in Judo. He is a Judo-ka as well as a Judo-Therapist. "In other words, he is a master of *Kappo*. We measured a sympathetic and a parasympathetic stimulation in the body while he climbed up to the mountain. We found the characteristics of the *Judo-ka* from the data including sympathetic and the parasympathetic nerve reaction after climbing the mountain. Study Protocol: Experiment for analysis of Judo-ka's feeling (AC301A, HF↑↓or LF/HF↑↓) was the first time as an experimental study of *"Shin-Poh"*. In other words this experiment is not a physical fitness test for the Judo-ka. We measured "the fluctuation of the feeling". *Shin-poh* is "a way of feeling" of martial artists. We were able to draw it. And we were able to clarify *"Shin-poh"* climbing a mountain by this experiment. In addition, we were able to depict that a Judo-ka's experience (and feeling) of the Judo and climbed a mountain. Conclusion (Result): We obtained that parasympathetic stimulation (HF↑) having expressed the psychological condition of *Agura* of the Judo-ka at the beginning of mountain climbing. During mountain climbing ("when he felt that took a break"), HF↑ represented a wave pattern of *Agura* and *Shizen Hontai*. These data suggested that the wave patterns during Judo playing could be similar to that of climbing. Keywords: *Riai* (The rational relationship of interactive movements between oneself and the opponent. *Riai* aspect of a psychological and physical.) *Shin-poh* (*Riai:* a psychological aspect.) *Gi-hoh* (*Riai:* a physical aspect.) *Agura*: Sitting with crossed legs. And meditation performed in the *Agura* and *Seiza* before and after training.

Shizen Hontai: An attitude of respect and thoughtfulness to one's training partners, opponents, and all other people, for all Nature.

Figure.2


PHYSIOLOGY OF EXERCISE

Experimental study of "Shin- Poh". Judoka's way of feeling

IDO MOVEMENT FOR CULTURE
Vol.13. no2 (2013), p89, 90

研究ノート３．の検討

武術の身体観には，単にフィジカル面での分析では，解釈できない現象学を抱えている。それは，身体の姿勢を表す言葉に「構え（正座，安座，自護体，自然本体）」，相手や人との距離（感）に「間合い」，動きを表す「さばき（前回りさばき，後ろ周りさばき）」，技の掛け方やコツを指す「理合い」等で，一見して，運動学，力学，心理学等で分析可能な事象ではあるものの，観察者（研究者）が実践家であるケースであって，研究方法の選択次第では，情報の取りこぼしが考えられ，文理一体化した議論の必要性がある。

特に武術研究の際には，体力，筋力のアップの為に発祥した技法ではなく，「効率よく敵を速やかに倒す殺傷目的」があり，柔術は様々な方法を取入れた総合武術であった。つまり，現代的スポーツルールを背景とした心身の測定実験の適用外の部分が多い。

例えば1900年前後に，アメリカ，イギリスの異種格闘技戦で，無敗を誇った東勝熊（堤宝山流柔術）は，「柔術という現象」をフル活用して，ユージン・サンドウ（ロンドン・ボディービルダー）以来の西欧筋肉身体文化の影響を受けた大型選手に，負けを知らなかった。こうした東の「柔能く剛を制す武勇伝」は，オリピアリズム近代スポーツの競技性が，隆盛の時代には，同じ研究舞台においては実証が困難であり，まさに武勇伝に終わる。

つまり，明治の時代であっても「柔術という現象」と「スポーツ競技という現象」は，研究の位相（トポロジー）が違うのだ。

さらに，我々の武術研究の興味は，その勝敗ではなく，体格や筋力，スポーツ感に劣る東が，なぜ勝てたのかを，「武術を本気で活用していた時代背景」の場で解きたい。その為には，柔術の技法の全容を解明し，その時代の国内外の社会的背景を，文献や資料をつぶさに観察，検討する事が必要である。

また，柔術の「総合武術性」は，それぞれの時代を背景に，技の目的が変化した変容史で語られているが，他流派間，他武術間での，交流が頻繁になされてきた「化学変化」には注目されていない。

例えば，日本における柔術の系譜に柔道や合気道がある事は，多く知られているが，国外の柔術流派集散の系譜や，再総合武術化（再統合化）については，現代の武術変容の傾向（新武術の勃興）であるにもかかわらず，身体文化論として取り扱われていない。

これらの課題を克服する為に，現在我々は，国内外における柔術，柔道，合気道，空手等の「素手で行う武術」の，技術変容文化史記述の為に，資料を収集，また，武術やスポーツ競技における体育・医科学的研究資料を多く収集し，武術的身体技法のスポーツ活用法を実践し，スポーツ医科学分析法を行い，「身体技法の化学変化」を検討している。

研究ノート４.

約500年近くの歴史を持つ柔術は，日本における伝統的身体技法といえる。また，この戦闘由来の技法は国内外の社会文化的影響を受け，ある部分は競技スポーツへ，またある部分は医療技術へ変容を繰り返して，現代に継承されている。

また，戦闘的技法に由来する柔術は，現代柔道や合気道，柔道整復，治療的手技療法等へ時代の要請に応え変容した。

本研究ノートにおいて，「柔術活法」を，軸として柔術の技法を検討してきたが，今後は「柔術活法研究」を武術と武術をつなぎ，変容の時代と時代の位相間をつなぐ，「ハブ装置」として，「柔術活法」を活用していきたい。また，「武術間の交流」にも着目したい。

Table1.は，全日本空手道糸東流に伝わる三大要素をまとめたものである。空手の流派の技を説明したものでありながらこの三要素の中には，柔術技法に酷似した記述を見出せる。また，この表から，空手道と柔術の濃厚な交流，融合の歴史を想像する事が出来ないであろうか。こうした命題を明らかにする際にも「活法ハブ」は有効に働くと考えている。

Table1. 糸東流空手道三大要素

1　殺法	2　活法	3　心法
極め技	殺活と救急法	呼吸法
投げ技	健康法	気の養成
関節技（逆）	自然治癒能力	瞑想法
捕縛		精神統一

全日本空手道連盟糸東会2013。君子の拳p68。

Table1.で扱った糸東流（空手）は，摩文仁賢和が，1933年に創設したもので，全日本空手道連盟の四流派（船越義珍・松濤館流，宮城長順・剛柔流，大塚博紀・和道流）の一つであり，柔術流派ではない。摩文仁は，沖縄空手（首里手，那覇手，泊手）の首里手を糸州安恒から，那覇手を東恩納寛量から学び，師の名字の糸，東の二文字を流派の名称としている。また，日本空手道の源流と見なされる沖縄空手の首里，那覇，泊の三流派の技法をそれぞれ習得し，特に首里，那覇の宗家筋に師事しているのは，日本空手道四流派のうち，摩文仁のみと言われている。

柔術と同じく，空手の場合も流派の系譜があるが，技法の違いには，首里手，那覇手，泊手等の由来により技法の比較が可能であり，現在調査中であるが，首里手の宗家松村（1809.～1899.）は琉球王朝（17，18代）の，御側守役を務めており，いわば武官として政府に仕える武術指南役であり，一方那覇手の東恩納（1853.～1915.）は，民間人であるという出自の違いを持つ武術家である。また，松村は薩摩藩に伝わる剣術

「示現流」を納めている事から，激しい攻撃性を示唆させる。一方，東恩納は，不動流柔術，天心流柔術を納めている事や，弟子の一人である宮城長順（剛柔流空手宗家）が，国外の普及の際にセルフディフェンス性を前面に表現している事から，那覇手には，柔術の技法が多く取り入れられてきた可能性はある。

おわりに

「精力善用・自他共栄」は，儒教的世界観を持つ古流柔術の理念であるが，柔術は，江戸後期から明治時代で「殺傷装置」から「精力善用・自他共栄装置」と変化していく。こうした変容は，明治期に隆盛を極めた天神真楊流柔術（東京）に見る事ができる。例えば，柔術の大衆化である。実践家が開く道場には，老若男女の庶民が「護身術」を，学ぶ為に柔術が開かれている。元々戦闘の技術であった柔術ではあるが，刀や槍を持つ武士階級の技法では無くなっていた江戸時代では，柔術は庶民的身体技法であった。明治期には，婦人を中心とする護身術として，或は，ほねつぎや接骨の医療術として，その他蘇生術，検死術，逮捕術，捕縛術等，にその技術は応用されている。現代に伝わる「柔術的な技法の全て」が，戦乱の時代において「活法」といわれた技法なのかもしれない。

後記

我々は，2013.11.28.の山陽新聞の記事に「陸上自衛隊がスパイを送った」記事を目にした時，その旧陸軍中野学校の武術師範で「藤田西湖」の名を思い浮かべた，神奈川県立小田原図書館に蔵書されている「藤田資料」は，武術殺法研究者の注目を受けて続けている。彼もまた「総合武術家」であった。

その資料の多くが「人，というものを改めて考えさせる。」資料ばかりである。

現代の武術研究においては，当然「活人武術」の研究でなければならない。しかし，たとえ悲しい歴史事実であっても，正面から正確に観察，分析，検討する事で「人間の探求」を行っていく。その場のイデオロギーに巻き込まれる事なく‥。

参考文献

坂上康博（2010.）海を渡った柔術と柔道，青弓社

全日本空手道連盟糸東会（2013）君子の拳

I. Masami S. Eckhard. (2012), Differential control of efferent sympathetic activity revisited. The Journal of physiological sciences 62(4) pp275-298.

H. Sudo J. Saito M. Nagai. (2012), The odor of Lavender maintains the pattern of autonomic nervous actives during sleep in humans exposed to stress. Mt. Fuji Study 6 (1) pp9-15.

F. Mikae T. Kazunori. (2012), Relationship Between Salivary a-Amylase Activity and Heart Rate for Evaluation of the Sympathetic Nervous System of Children with Aurism. The Japanese jurnal of special education 49(6) pp671-684.

M. Tezuka. (1978), Experiment physiologic study of "*Ochi*" by the judo choke Bunkasibou. Co. Ltd., Japan.

T. Asami. (2000), Effects of *Kappo* Resuscitation Techniques in Budo Society of Mind-Body Science 9(1) pp43-56.

K. Kuboyama. (2012), Study of *Kappo*-Transformation of the *Jujutsu Atemiwaza*-Japanese Academy of Budo Vol.45 p55.

H. Magara Technique of Takeuchi-Ryu Jiujistu Meiji Univ. collection of treateies 258: 39-57, 1993

M. Tezuka. (2011) Think about *Ochi* and *Kappo* Journal of Judo vol.18(9) pp72-73.

T. Sasaki. (2004) Judo activity of the people with a disability Bulletin of the Faculty of Education, Fukushima University. Education, psychology Vol.76 pp11-19.

T. Sasaki B. Brad A. Murata. (2005) The Possiblility of Kinesitherapy for the Mentally Ill people Applying the Characteristics of the Martial Arts (Budo) Bulletin of Center for Research and Development of Education, Fukushima University Vol.48 pp89-95.

N. Murata Y. Toudou. (2005) A study on the origin of Jigoro Kano's concept of mutual benefit in Judo Kodokan 10 pp7-13.